

「一番」に思う

安藤姓の私は、小中時代に出席番号が三番より後ろになったことがありません。出席番号が若いと、何をするにも順番が早く回ってききました。身体測定、テストの返却、国語や英語の音読、音楽の歌のテスト……まだまだたくさんありました。

当時、予防接種を学校で受けていました。要するに、注射ですね。予防接種がある日には、皆、朝から緊張していました。クラス順番が来ると、「わあー、来たあー」と言っって声を上げていやがっていたことを覚えています。

出席番号順に並んで、白衣を着たドクターの前に出ていきます。ドクターは流れ作業のごとく、次から次へと無言で針を刺していきます。それがまた不気味で、子どもだった私たちの恐怖心を煽っています。出席番号の若い私は、いつも早めに打ち、順番を待つ仲間の前を通過して教室に戻っていました。

その時、その仲間から辺りをはばかりる小声で発せられる言葉がありました。それが「痛い?」「痛かった?」という言葉です。不安そうな表情で体育座りしている仲間を見て、私は思いました。

「そうかあ。注射を先に打った者の様子が、これから打つ仲間に影響を与えるんだ。おもしろい!」

その後の私は、仲間の不安をもてあそぶように(?)、痛くないのに痛い様子で彼らの前を通過したり、痛いときには平気な様子で通り過ぎたりしました。自分の様子が仲間に影響を与えていることが妙に楽しくて、いつの間にか出席番号が若いことが気にならなくなっていました。

昨日の校内の会議で、「その日の日付で生徒を指名することはやめましょう」という指摘がありました。指名する側には大した意図はないことのように思われますが、生徒が快く思っていないのならやめるべきだと私も思います。

しかし、指名が絶対必要な時があることを知っておいてください。「これを他の生徒に広げたい」というときには、教師は指名します。その意見や考え方をうずもらせたくないですからね。そういう指名は名誉なことだととらえてくださいね。

職員の一人として、指摘を真剣に受け止める一方で、私の脳裏には先に書いたような幼い時の自分が蘇ってきました。不謹慎だと思われるかもしれませんが、許してください。

真っ先に指名されたり、一番に取り組まなければならなかったりすることには、思いがけずよさがあるものです。一番だから周りが注目する、一番が基準になる、一番だから周りに影響を与えるということです。野球やソフトボールの一番打者は、投手の球筋を見極め、後続の打者に情報提供したりアドバイスしたりします。また、先頭打者が出塁するとチームが勢いづきます。一番はまんざら捨てたものではないかもしれませんよ。

(二月九日記)